



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リカアドオとボウズンキット
Author(s)	田中, 生夫
Citation	北海道大學 經濟學研究, 12, 77-97
Issue Date	1957
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31035
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_P77-97.pdf



リカアドオとボウズンキツト

田 中 生 夫

は し が き

一八四四年のピール銀行法をめぐる通貨原理と銀行原理との論争の起源を、一八一〇年前後の地金派と反地金派との論争に求める考え方は、かなり普及している。そしてそれには、もちろん相当の根拠があるとせねばならない。しかしながらそれにもかかわらず、地金派→通貨原理、反地金派→銀行原理という二つの学説史上の系譜について、これを簡単に承認してよいかどうかは問題の存するところであろう。この点について決定的な意見をのべるためには、多くの事項の解決を必要とするといわねばならない。しかしながら、ここで私がまず何よりも注意したいことは、一般的にもそうであるが、とくにわが国においては、これまでの諸研究の重点が、地金論争については地金派とくにリカアドオに対して、通貨論争については銀行原理に対して、むけられてきており、したがって十分に整わない理解の中で法則化がなされているようにみえるということである。だから、地金派と反地金派との対立についてその理論的な内容を明確にしておくこと、とくにこれまで軽視されていて、ほとんどみるべき研究のなされていない反地金派の主張に対して、基本的な分析を加えておくことが、この学説史上の系譜の問題を考える場合の、何としても最初の課題であるといわざるをえない。

ところで地金論争における問題は、いうまでもなく、外国為替の下落や金地金の価格騰貴の原因をどう考えるかであつた。地金派はこの原因として、銀行券の過剰発行とその結果たる減価とをあげたが、このことは具体的にはイングランド銀行の発券政策を非難する意味をもつたので、この発券原理をめぐる議論が当時の論戦の焦点となつたことは明らかであり、その後においても人々のこの論争に対する注意は、多くこの点に集中せられたといつてよいであらう。しかしながら、この点とともに、これの影におかれたようになって十分な考慮が払われていないきらいがあるが反地金派は問題に対する解釈を国際収支に求めていたのであるから、このことの理論的意味に対しても十分注意しなければならぬであらう。要するに私は、問題が世界商業に連関する貨幣・信用の現象をどう理解するかにあつたことを、改めて想起したいと考えるものである。

本稿は、地金論争において対立した両派をリカアドオとC・ボウズンキットによつて代表せしめつつ、その対立の理論的な内容を右のような線にそつて明確にし、これを通じて地金論争と通貨論争との間の理論的な対応を考察するさいの、何がしかの手がかりを見出すことを目的とするものである。

- (1) いちいち示すまでもないが、代表的なものとしては、Lewinsky, J. S., *Money, Credit and Prices, 1929*; Horsfield, J. K., *The Duties of a Banker. I, in 'Papers in English Monetary History', ed. by Ashton and Sayers, 1953*, などがあり、とくに前者は図式的な説明を与えている典型的な例である。わが国の文献としては、むしろ、新庄博『貨幣論』(同書、二〇四ページ)がある。
- (2) 地金派に属する主要な文献については、Mason, W. E., *The Stereotypes of Classical Transfer Theory, Journal of Political Economy, Dec. 1956*, p. 498, n. 36. を参照。リカアドオが伝統的にこの派の代表とみなされてきた理由については、C. リストがのべている『貨幣信用学説史』天沼訳、一六八ページ)。
- (3) 反地金派の主要文献については、Mason, op. cit., p. 498, n. 35. を参照。周知のように、ボウズンキットはリカアドオによつて、地金報告書に対する批判者の中に「あつた」と認められてゐる(『Works and Correspondence of D. Ricardo,

ed, by Sraffa, *etc Works and省略* Vol. III, p. 159).

なおここでボウズンキットについて一言しておこう。彼はイングランド銀行の総裁を勤めたサミュエル・ボウズンキットの子で、南海会社の総裁であり、かつロンドンの著名な商人であつた。彼は、『地金委員会の報告書に対する実際の批判』(Practical Observations on the Report of the Bullion Committee, 1810. の以前にも、三つのパンフレットを書いているが、それらはいずれも当時の砂糖やラム酒などの西インド貿易に関して論じたものであり (Palgrave's Dict. of Pol. Econ., Vol. I, pp. 168-9)、彼をいわゆる西インド商人の典型とみてよいと思われる。当時の西インド商人については、拙論「地金論争と商人階級」(『岡山大学法経学会雑誌』、第一九号、二九ページ)を参照。

一

以下に、リカアドオとボウズンキットの見解の主要な点を、それが発表された順序にしたがつて、すなわち、大体『地金の高い価格』、『実際の批判』、『ボウズンキット氏に答う』の順序で検討してみよう。

- (1) ここで、リカアドオとボウズンキットとの間の論争に関連する文献史といった問題に、少しくふれておこう。地金論争一般の問題に関しては、私はすでに多少のことをのべた(拙論「地金委員会小史」『金融論選集』II所収)が、ここではとくにこの両者についてやや詳細に検討しておきたい。

リカアドオは、一八〇九年八月二十九日、九月二〇日、十一月二三日のモーニング・クロニクルに、それぞれ小論を寄稿した後、有名な『地金の高い価格』を書いた。この第一版のはしがきには同年十二月一日の日附がある。ボウズンキットはこれが同年末に出版されたとのべているが (Bosquet, *op. cit.*, 2ed, p. 27) スラッファはその正確な出版の日附は必ずしも明白でないとなし、結局、モーニング・クロニクルへの第三の寄稿から一ヶ月の後といっている。この第一版とはほとんど変らない第二版は一八一〇年の二月末に、かなりの変更を含む第三版は同年三月の始めに出版になつた。地金委員会が任命されたのは二月一九日であり、その報告書は六月八日に下院へ提出され、八月一三日になつてこの報告書の正式の議会の版本が出版された。論争はこの出版を契機として急激に活潑となつたのであり、その白熱化した勢は翌年まで継続した。なお報告書は議会の出版にかかるもの外にも、当時、私人によつて数種のものが出版されたのであつて、この点については Fetter, F. W., *The Editions of the*

Bullion Report, *Economica*, May 1955, pp. 152-4 を参照。

ボウズンキットの『実際の批判』の第一版あとがきには十一月一日の日附があり、これは十一月後半に出版された。訂正増補された第二版のはしぎは十二月一日附であり、出版は年末になされた。リカアドオは、この第一版の出版後直ちに『ボウズンキット氏に答う』を書き、これを印刷に附した後にその第二版を読んだ。そこでまた直ちにこの第二版の補論に対する批判を書きこれを附録として加えることにしたので、『ボウズンキット氏に答う』は結局一八二一年一月始めに出版された。マルサスはエジンバラ・レビューの一八二一年二月号に『紙幣の減価』を書いた。この論文は地金問題について出版された主要なパンフレットに対する書評であるが、その中には、リカアドオの『地金の高い価格』と『ボウズンキット氏に答う』およびボウズンキットの『実際の批判』がとり入れられている。彼は双方に対して批判を加えたが、リカアドオよりボウズンキットを強く非難して、『穏和な地金主義者』たることを示した（“Depreciation of Paper Currency,” *Edinburgh Review*, Vol. XVII, 1810-11, pp. 359-372. reprint in “Five Papers on Political Economy, T. R. Maltus,” edited by Renwick C., Sydney, 1953）。リカアドオの『地金の高い価格』第四版は一八二一年四月に出版されたが、この附録で彼はマルサスが彼に加えた批判に反批判を与えた。（この記述は、とくに示したものを除く。Works III, pp. 3-12 による。）

リカアドオの貨幣論については、すでに内外において数多くの研究がなされているが、『経済学批判』による一、おう、「見事な論評」（玉野井芳郎「古典経済学の信用理論」、『信用理論体系』Ⅲ、六二ページ）は、とくに有名である。一言にしていえば、「その当時の大いイギリスの著述家は、まったく別の法則によつて規定される銀行券の流通を、価値章標あるいは強制通用力を有する国家紙幣の流通と混同し、かつ、この強制流通の諸現象を金属流通の諸法則から説明すると称しながら、実際には逆に、後者の諸法則を前者の諸現象から抽象している」（マルクス『経済学批判』、宇高訳、二五三ページ）ということにつきよう。私は既存の諸研究とのいたずらな重複を避けることに留意しつつ、本稿の目的にそつて最少限度に必要と思われる叙述をしておこう。

リカアドオが、銀行券の理論をも含めた貨幣理論の全体を、純粹金属流通の理論から出発せしめていることは、き

わめて重要である。そこで記述は当然この点から始められねばならない。

金は、他の商品と同様に、これを生産し市場へもたらすに要する労働量に比例して価値をもつ。しかるに彼においては、金は流通手段としてのみ扱えられているので、一国に存在する金はすべて流通する。商品総量の価値を一定とすれば、諸商品の価格はこの流通量のいかにしたがって騰落する。逆にいえば、金の相対的価値は流通量にしたがつて変化する。つまり、流通する金の価値は金の価値以下に下落することとなる。それゆえ、諸商品が高価であることは貨幣が低廉であることに外ならない。そこで「およそ正貨が債務の支払のために外国へ輸出されるのは、それが過剰である場合、すなわち、それがもつとも低廉な輸出可能の財貨である場合のみである」(Works, III, p. 63)ということになる。しかし彼においては過剰は単に金流出の原因ではなく、支払差額つまり為替下落の唯一の原因なのである。⁽²⁾彼は他の箇所では、「財貨の対価として貨幣を輸出せしめる誘惑、すなわち、不利な貿易差額は、通貨の過剰以外のいかなる原因からも生じえないようにみえ」(Ibid., p. 59) といっているからである。この場合、過剰とはもちろん相対的な言葉であり、外国との関連をぬきにしていわれているのではない (Ibid., pp. 56, 61)。だから、C. リストにしたがつてこれを近代的な用語でいい表わすならば、「一国から他国への金の移動は、ただ一つの事情によつて規制されている、すなわちそれは、物価の相対的水準であつて、またこの水準自体はその国に流通している貴金屬数量……の作用なのであり、それはまた各国における貴金屬の相対的騰貴あるいは低落の表現なのである」(リスト、前掲書、一九九ページ)。だからリカアドオが、相対的な高価と低廉という言葉は欠乏および豊富と混同したこと、またとくに金がすぐれた国際的支払手段、いわゆる世界貨幣であることを忘たれことは明かなのである (前掲書、二〇三—四ページ)。

(2) リカアドオは、貨幣の過剰を、ある時は金流出の原因としてのみのべ、べつの時には支払差額や為替の原因としてのべている。

彼はこのようにして、意識的にか無意識的にか、貨幣の過剰以外の原因から為替が不利になりうるとの主張から、自分を弁護しているように思われる。たとえば、ソーントンが凶作のさいの穀物の輸入が貿易差額を不利ならしめることを主張しているのを批判して、「われわれが過剰な通貨をもち、したがってそれを輸出の一部たらしめるのが適当であるという場合でなければ、われわれは輸出する以上の貨物を輸入しないであろう。……鑄貨の輸出は不利なる貿易差額の結果ではなくて、むしろその原因である」(Works, III, p. 61 傍点は筆者)といっているが、このさいにも、過剰を金流出の原因として示す点にこの記述の重点があるように思われる。彼は右の引用文にすぐ続いて、「右よりも一そう極端な場合であるが、外国援助金の支払を承諾したときにも、その支払をより低廉に実行しうる財貨のあるかぎり、貨幣は輸出されないであろう」(Ibid., p. 63 とのべているからである。さらにまた、ソーントンの主張と同じことをマルサスのべたときには、リカアドオは凶作が為替の原因であることを明白に認めたが、しかしそれは凶作のために通貨が相対的に過剰になることを通じてであり、彼の理論に矛盾しないものとしてなのであった (Ibid., p. 106-7) しかもこの場合には外国援助金については彼は賢明にもふれていない。このような不備を残しつつも、彼はより明瞭に「不利なる貿易差額したがって低い為替相場は、いかなる場合にも、通貨の過剰ならびにその低廉なることより生ずる」(Ibid., p. 116) と断定する。

つぎに彼の銀行券の理論であるが、彼は銀行券が、「商人への貸付や政府への前貸の方法で発行される」(Works, III, p. 56) ことをもちろん知っているが、しかし他方で「銀行が貸出を行おうとするかぎり借手はつねに在存する」(Ibid., p. 17) のであつて、銀行券に独自の発行方法は無視され、結局、銀行が創設されて新に銀行券が流通に追加される場合の効果は、金鉱の発見の効果と同一視され、銀行券の価値はその流通量によつて規制されることとなる (Ibid., p. 56)。だから銀行券は増発によつて価値を減少するのであるが、しかし兌換が維持されているかぎり、銀行は、銀行の存在しないときにおける流通金の価値以上にこれを増発できない。何となれば、増発されて価値の減少した銀行券は金を輸出する目的のために兌換請求されて、銀行に復帰するからである。したがって金と兌換銀行券とがともに流通しているとき、いわゆる混合流通の下においては、銀行券の増発により金と銀行券との全体、つまり流通手段の総

量が金の価値以下に低落する、そしてこの場合においても、結局流通手段の総量は減少し、その過剰は自動的に調節されるにいたるのであつて、純粹金屬流通の場合と異ならない⁽³⁾。ところで兌換による数量の制限と、その結果たる価値の維持のみが兌換銀行券の特色とされるのであれば、不換銀行券は銀行の思うままに、つまり取引の要求とは無関係に増減されうることとなる。かくして支払制限令以後銀行券は増発されて、その価値はそれが代表すべき金の価値以下に下落し、この銀行券の減価こそが、いちぢるしい為替の下落と金地金の騰貴をもたらしたのである。

(3) この混合流通の下における、金と銀行券との全体の価値下落という考え方は、最初は『地金の高い価格』で明示されない形でいわれた (*Ibid.*, p. 55) 後、『ボウズンキット氏に答う』において始めて十分明瞭に示されるにいたつたものであり (*Ibid.*, pp. 210, 215) ついでまた『地金の高い価格』の第四版附録でものべられた (*Ibid.*, p. 114)。彼は後年にいたつて混合流通制度の下における諸問題に着目し、この点に関する見解を一そう展開させたものと考えられるが、この時期にはこの制度に対して信頼をよせており、単に兌換制度——もちろんいわゆる金地金本位制の意味で——の維持を主張したにすぎなかつたようである。この点については後でより詳細にのべることにする。

二

ボウズンキットは、リカアドオの『地金の高い価格』が完全に理論的で、いまだ実験の試練にかけられていないゆえに十分であると非難し、また地金報告書については報告書の実体をなしている理論的な見解と、その附録の証言録に充滿している実際的な見解とが明白に対立していることを指摘した (*Bosanguet, op. cit.*, pp. 2-4)。彼は報告書の理論的な主張を六つの命題として示し、そのそれぞれに対して實際上における真偽いかんを確かめようと試みた (*Ibid.*, pp. 8-9)。そしてリカアドオはこの六つの命題に対して、「あらゆる根本的な点において私がさきに示したものと同じである」との *veritas* (⁽¹⁾ *Works*, III, pp. 161-2)。

(1) その六つの命題はつぎのとおりである。

第一 諸外国との為替の変動は、かなりの期間については、貴金属を一国から他国へ輸送し、かつ保険に附する費用を超過しえないこと。

第二 金地金の価格は、それに対する支払にあてられる通貨が金の価値以下に減価しているのではないかぎり、造幣価格を超過しないこと。

第三 輸出入に関する税関報告から推論しうるかぎりでは、為替の状態は特別に有利でなければならぬこと。

第四 イングランド銀行は、支払制限の間は、銀行券の流通を統制する権能を独占的にもつものであること。

第五 地方銀行券の流通は、イングランド銀行からの発行に依存し、かつ比例していること。

第六 現在、紙券通貨は過剰であり、金と比較して減価していること、また地金の高い価格と為替の低いレートとは、かかる減価の結果であるとともにまた兆候であること。

なお第三の命題が理論的なものでないことは明かであるが、リカアドオは後で、自分がこの命題を提供したことはないとのべた (Works, III, p. 213)。

私は、ボウズンキットが加えた実際の批判の中で、さきに示したリカアドオの貨幣理論がどのように批判されているか、また諸事態の分析としては、リカアドオに対抗して基本的にはどのような主張がなされたのかについて、検討しようと思う。だがこの前者の問題はかなりやりにくい仕事である。何となれば、まず、地金報告書とリカアドオとは、後にものべるように、重要な理論上の相違をもつものであるが、ボウズンキットはこの両者を同一視して、あるいは少なくともその相違にふれないままで、報告書に対して批判を加えているからである。換言すれば、ボウズンキットが批判の対象として示した前記の六つの命題は、リカアドオに固有のものを的確に指摘してはいないからである。つぎに、ボウズンキットが、「抽象的な議論は私の目的には無関係であり、批判はすべて事実にもとずいてなされる」(Bosquet, op. cit., p. 1) という方針をとっていることにも関係がある。このために一方で彼は重要な議論を回避す

ることとなり、また他方では彼が抽象的な理論自体の真理を否定しているのかどうか明瞭でなくなるからである。⁽²⁾

(2) ボウズンキトは第二版の附録の冒頭で、彼の第一版が諸原理の真理を非難しようとしていたのかどうかについて、くり返し質問を受けたことをのべた(Bosaquet, op. cit., p. 118) 後に、この問題に対する彼の一般的态度を明確にした。それによれば、彼は、諸原理が経験やもつとも定評ある著作家たちの見解と一致するときにはこれを承認するが、そうでなければ承認できないし、またある場合には、かりに原理自体には賛成しても、その實際への適用については賛成しえない、というのである (ibid., p. 117)。

リカアドオの理論の基本的部分に対する批判は、右にいう第四の命題に関連してのべられているが、ボウズンキトによれば、銀行券を任意に増加させるイングランド銀行の権能に関連する二つの重要な事項が、同銀行の理事たちの証言の中に発見される。第一は、もし流通に過剰があれば、紙券は銀行に復帰するということであり、第二は、真正の取引に対して与えられた堅実な手形を割引くことであるが、第一点は委員会によつてほとんど注意を払われておらず、また第二点は極端に軽視された。そこで、彼はこの問題を正しく理解するためには、銀行券の流通に伴う諸事情を分析しなければならないという (ibid., pp. 49-51)。

ボウズンキトはまず、リカアドオが銀行券の発行の効果を金鉱発見の効果と同一視したにかかわらず、彼がその比較のための根本的なこと、つまり「発行に当つて、その保持者に再びそれに対してひとしい価値を与えるとの約束、または発行したものを回収し償却する希望、もしくは、手段をもっているかどうか」の点を無視したとなして非難した (ibid., pp. 51-2 傍点は筆者)。すなわちいう。「イングランド銀行が銀行券を発行するについての原理は貸出の原理である。すべての銀行券はなにびとかの要求によつて発行される、その人はその発行額だけ銀行に対して債務を負うこととなり、しかもこの銀行券またはこれとひとしい価値の他の銀行券を、一定の遠くない時期に、許された期間に応じ

た利子とともに、返還する担保を提供するのである。……イングランド銀行から銀行券をとり出すにはいくらか費用がかかる、つまり借入れた貨幣に対する利子がかかるということが、この発行方法の結果なのである。有形無形のサービスの支払に、それに対する対価として発行される銀行券はまつたくない。したがって、金鉱からの発行とイングランド銀行からの発行との間には、何らの類いも存しない」と (*Ibid.*, pp. 52-3)。つまりボウズンキットは、鉱山からの金や政府銀行からの紙券は「支払われてしまい発行者に再び復帰しないが、銀行券は貸付けられるだけで発行者に還流する」(フラアトン『通貨調節論』、福田長三訳、九二ページ) ということを明確にし、後にフラアトンが「兌換性を別とすれば、銀行券と強制政府紙幣との間の性質上の根本的差異」と呼んだ(前掲書、九一ページ)ものを把握したのである。

つづいて彼は、過剰の銀行券が銀行へ復帰する仕方を、シテイの金融市場の實際をのべることによつて説明した。この点に対しては、マルサスとともに、「ボウズンキットが、イングランド銀行での割引需要が自然に自己調節的である仕方について詳細な説明を与えたことは多とすべきである」(Malthus, op. cit., p. 358) といいうるであろうが、しかしその説明は要するに、商業上の目的に必要であるより以上のものが過剰であり、かかるものが発達せる金融市場にはみられないことをいうだけにすぎない。

(3) 「私はロンドンの銀行家たちの間では、貨幣がいかに急速にその適所に落着くものであるかをすでに示した。そこでその結果、一般的な推論としては、シテイに手放しうる遊休貨幣が存在するかぎり、一流の割引業者たちがイングランド銀行に出かけてゆくようなことはないということになる。このことは、理事たちが過剰の防止のために与えた回答の説明となる」(*Ibid.*, p. 56)。またつぎのようにもいう。「公衆が手もとに保有しようとする銀行券の分量が、日々の支払の履行に必要な量を超えないかぎり諸商品の価格に影響を及ぼすような過剰はない、……この分量を超えるとそれは割引に利用される、そしてこの割引が行われただけイングランド銀行に対する割引需要は減少し、したがって銀行券は減少する。……第一流の割引業者による割引需要の再発

が、とりもなをさす過剰の減少を示している」(Ibid, pp. 68-9)。

さらに彼は、思弁的な人々に対しては、彼らといえども反対しえないような有力な理論を準備しているとなして、イングランド銀行の理事がのべた發券方針、つまり真正手形主義 Real Bill Doctrine をスミスの權威でもつて裏付けた。そこで『国富論』第二篇第二章の有名な一節(大内訳、第二分冊、五七—八ページ)が引用される。彼はスミスにしたがつて、紙券の量が手もと準備金を超えぬかぎり、それは容易に流通しうる量を超えるものでなく、この結果をもたらしための銀行の發券原理としては真正手形主義が必要であるというのである。ホースフィールドがこの時の銀行理事のこの發券原理の主張を評してのべた(Horsfield, J. K. Duties of a Banker. II, in *Papers in English Monetary History*, p. 17) ように、ボウズンキットは、スミスが兌換銀行券についてのべたことをそのまま不換制度の下でのべて、自らの弁護に利用しているのであり、スミスを単に言葉だけ利用したものであるということができよう。すでに一言したところから明かなように、彼は銀行券が還流という独自の法則にしたがうことを示しており、還流の方法としては兌換と返済との二つを暗に知っていたようにもみえる(Bosquet, op. cit., pp. 51-2 からの引用の傍点の部分を参照)。しかし概していえば、彼は返済については強調したにかかわらず、兌換についてはふれるところがなかつた。彼はまた金の増加と銀行券の増加との根本的差異を示すのに急であつて、リカアドオの純粹金屬流通自体についてどう考えているのかという、もつとも重要な点に関してはこれの議論を回避した。たとえば彼は、リカアドオとともに金鉱の発見が諸商品の価格を騰貴せしめることを承認した(Ibid, p. 62)のであるが、金屬流通の自働的調節機能については、「自由交通をもつ諸地域においては物価が流通媒介物を均等化するのに役立つとの理論について議論するのは、私の目的には関係がない」(Ibid, p. 63) というだけである。

彼はこのようにしてイングランド銀行券の過剰、したがつて減価を否定する⁽⁴⁾。それゆえ、「彼が紙幣の強制流通は為

替を下落させると考えているかどうかをきめるのは困難である。彼は為替と銀行券の量との間には関係がないと確言している」(Works, III, p. 214) といふことになる。

(4) 彼は銀行券が過剰であるところか、必要量以下であることをさへ推定しようとしている。すなわち、スミスが、紙幣の量が国庫に対する租税の支払の方法で使用しうる分量より以下に保たれているときには、紙幣に対してプレミウムが与えられることをのべている『国富論』前掲第二分冊、一〇一ページ)のを引用しつつ、当時の租税額がイングランド銀行券の流通額の三ないし四倍に達することを指摘しているからである(Bosanquet, op. cit., pp. 86-91)。しかしながらこの主張が全く批評に値しない誤りであることは、も早改めというまでもないであろう。

かくのごとくして彼によれば、為替と地金の価格の変動の原因は支払差額にある(Bosanquet, pp. 44-5)。当時の為替の下落は、貿易差額が少し有利であるのに対して、政府の巨大な外国経費が加わつた結果であると考えられるので(Ibid., pp. 102, 123) 輸出入の改善や外国援助金の減少をまたずして、流通手段を収縮しても事態の改良をもたらすことはないということになる(Ibid., p. 102)。またリカアドオが輸入穀物に対して金と商品とのどちらを輸出するかは完全に利害の問題であり、飢饉に備えている時でも、過剰の通貨をもつのでなければ輸出以上に輸入することはないと主張したのに対して、彼はこれを真空中での実験にたとえて非難した(Ibid., p. 48)。かくして、彼が他方で金屬流通の自働的作用についての議論を回避したにかかわらず、事実上においてリカアドオの為替や金の流出入に関する、狭隘な見解を克服するより広い観点にあることを、承認しうることとなるであろう。そしてこれに関連していえば、地金派の中でもソーントンやマルサス、ブレーク、ホーナーなどの人々は、この点ではボウズンキットと同じ見解をとっているであつて、これはとくに強調されねばならない点である。

(5) マルサスは、リカアドオの為替の変動に関する見解が部分的であると非難した。彼は通貨の事情の外に、諸国における欲望の変化を指摘し、ソーントンが凶作の為替に及ぼす影響を論じたのを弁護した(Mathus, op. cit., p. 342-5)。ブレークも、為替変

動の原因を、支払差額に依存して通貨状態には無関係なものと、通貨の価値に依存して債務に無関係なものとに区分した (*Ibid.*, p. 346)。ホーナーは、一八〇二年にエジンバラ・レビューに発表した「ソーントンの紙券信用論に対する書評」の中で、貿易差額の不利のうちに外国援助金の効果を含めねばならないことをのべており、『ソーントン・紙券信用論』、渡辺・杉本訳・附録三五(一ページ)、この点でマルサスやブレークに近い見解であると思われる。なお一八一一年におけるホーナーの立場については、拙論「地金委員会小史」附録(前掲、一七二ページ)を参照。

三

ボウズンキットが支払制限下の価値尺度を三步利付公債三三ポンド六シリング八ペンスに対する利子であるとなした (*Bosanquet, op. cit.*, p. 123) ことは、マルサスによつて、かつてなきもつとも奇妙な自己欺瞞であると評された (*Malthus, op. cit.*, p. 357)。彼はまた私が指摘したように、批評に値しないような誤りも犯した。しかしそれにもかかわらず、その実際の批判の多くが極めて強力であつたことも承認しなければならない。これに対するリカアドオの反批判について、まず一般的にいっておくならば、彼は時に若干の譲歩を示した。諸商品の価格に対する租税の影響についてはこれを承認せざるをえなかつたのであつて (*Works, III, p. 241*)、これは彼の理論にとつて重大な譲歩といわざるをえないが、しかしレビンスキーが指摘したように、リカアドオは主たる推論においてはこれを無視した (*Lewinsky, op. cit.*, p. 101)。またマルクスが、「リカアドオがいかに現実の諸現象を彼の抽象的理論にふさわしいように暴力的に組立てているかは、二、三の例をみれば明かとなるう」(『経済学批判』、前掲、二六五ページ) といひ、さらに「リカアドオは、たとえばボウズンキットとの論争の場合のように、窮地に陥ると独断的な確言に逃避する」(前掲書、二六一ページ) と辛らつた批評を加えていることも注意しなければならない。さらにいうならば彼は一方で金をもつばら流通手段として説きながら、しかも他方では事実上金の退蔵を認めているのであつて、しかもこの矛盾に気付かない

でいる場合すら認められる（末永茂喜『古典派経済学研究』、一一—二ページ）。

さて問題の、イングランド銀行は銀行券の流通を強制する力を有しないというボウズンキットの議論に対する、リカアドオの反批判であるが、これの多くはマルクスのいう独断的な確言に類するものであらう。すなわちリカアドオは「銀行券は商業が必要とするよりも以上に発行されないという抗弁は何らの意義もたない、何となればかかる目的のために要求される額は、元来無限であるから。商業の要求は飽くことを知らないものである」(Works, III, p. 216) といい、また金鉱の発見と銀行券の増発との「類似は完全であり、かつ争をいれないように思われる。……私はいたずらにその有利な用途を求めながらもそれを見出しえないで、結局さきに割引された手形の支払のために、銀行に復帰するところの、または銀行がその額だけではどうしても貨幣の前貸に利用しえないところの、過剰部分の存在すべきことを否定する」(Ibid., pp. 217-8) と主張するにすぎないのである。しかしながら彼が「堅実な取引にもとづく手形以外のいかなる手形の割引をも拒絶するということは、流通手段の制限方法としては効力がないであらう」といい、この証明のために、ソーントンが『紙券信用論』で真正手形と空手形との区分のために利用し（前掲書、五五—七ページ）、また彼自身もすでに一八一〇年九月二四日のモーニング・クロニクルへの書簡の中のべた (Works, III, pp. 160-1) 例を、すなわち、商品が数人の商人の手を経て順次に売却されるとき、この真正の取引に対して多数の手形が振出され、銀行がこれらを割引くという事例を、多少修正して用い、さらに、ボウズンキットがこの原理をスキスの言葉をもつて、しかもスキスの意図に反して弁護していることを指摘した (Ibid., pp. 219-20) ことは極めて適切であつたといつてよいであらう。

またリカアドオは当時支払差額が不利である事実を明白に承認したが、それにもかかわらず、根本的には、「私はひたすらに委員会の諸原理を擁護しようと呼ぶものである、そしてその事実はこのらの原理にとつて決して根本的なも

のではない……」(Ibid., pp. 205-6) という頑強な主張をなすのみであり、その議論の多くは言葉の遊技に終つた。なおつけ加えるならば、為替が支払差額によつて決定されとのボウズンキットの主張に対するリカアドオの反批判は、為替変動の原因についてのリカアドオの狹隘な見解を非難したマルサスに対する反批判の形で、『地金の高い価格』の附録において、より詳細に示された。しかし彼のこの反批判も、ホーナーによれば「明瞭さの点では、リカアドオとしてふつうの場合ほどうまく書いておらず」(Fetter, 'The Authorship of Economic Articles in the Edinburgh Review, 1802-47, Journal of Pol. Econ., June 1963, p. 237) またリストによれば、「極めて晦渋で、とり上げるに値しなう」(前掲書、二〇三ページ)ものであつた。

四

さてここで、これまでの記述を総括し、理論的にみた場合にこの論争の基本点をどこに求めるべきかについて考察を加えておこう。

リカアドオは、不利な貿易や低い為替相場の原因をもつばら国内通貨の相対的過剰の問題として把握した。彼は敵国の突然の侵入や財産の所有を脅かすような一国内におけるある種の変動が、この原則の例外をなすことを認めたが (Works, III, p. 116) 凶作や外国援助金が独立に原因として働くとは考えなかつた。しかしながら国内通貨が純粋金属流通または混合流通であるときには、通貨の過剰や地金の流出は自働的に匡正されるのであつた。そしてこのような考方は、彼にあつては、貨幣理論が正當にも金属流通の理論の上に立てられていたにもかかわらず、その金属流通の理論が価値章標の現象の中から抽象されるという逆立ちを示していたこと、そしてなにかんずく、世界貨幣たる金が事実上商品と混同されたということに、もとづいたのである。だから要するに彼は、世界商業に連る資本制生産

と流通との過程を、単なる商品流通したがって単なる貨幣流通として単純化し、さらに信用流通をもこの貨幣流通に解消したのであつた。なおここで一言しておくならば、彼は当時、混合流通について信頼をよせており、この制度の下における問題を無視していた。つまり初期のリカードオは、不換銀行券の流通を金属流通や混合流通から区分するに急であつて、混合流通自体については考察が成熟していなかつたと考えられる。この点については後述することとして、ここではとりあえず、後年になつて彼が金の商品価値（購買力の意味）における変動の事実を認め、この変動の重要性を主張するにいたつたというセイヤーズの指摘 (Sayers, R. S, Ricardo's Views on Monetary Questions, in 'Papers in English Monetary History' p. 77) に注意しておくことしよう。

このようにリカードオが、彼の貨幣の全理論を明瞭な金属流通の理論の上にうち立てておりながら、しかもその基礎において誤つていたのに対して、ボウズンキットは、これに比すべき何らの明白な金属流通の理論をもたないままに、実際の考察を通じてリカードオの基礎理論の誤りを指摘することができたといえよう。他方でボウズンキットは、銀行券の流通法則についての基本的な認識に到達したにかかわらず、銀行券を金や政府紙幣から区分するのに急で、銀行券の兌換の意義、したがって銀行券の基礎たる金を把握する点において十分でなく、その貨幣・信用に対する理解はあくまで断片的たるにとどまつた。予金通貨については彼もこれを看過したというの外はない。

さて、リカードオとボウズンキットとの間の論争について、理論的に注目すべき点を以上のように把握することができる。私はこのことから、この論争と後の通貨論争との間の理論的な関連を問題にするさいの、重要な手がかりがえられるように思うので、この点について少しのべてみよう。

まず地金派と呼ばれる人々の主張の中にも重要な理論上の差異が認められることに注意したい。為替相場や金の流出の原因をもつばら通貨の過剰に求めるものはリカードオとホイットリーだけであつて (Viner, J, Studies in the Theory

of International Trade, p. 129) 其他の人々はより広い観点にあつたが、⁽¹⁾とくにマルサスは通貨の及ぼす影響は商業取引のそれより緩慢であるとみなしていた (Malthus, op. cit., p. 360)。さらにリカアド自身についていえば、さきに指摘しておいたように、彼は後年にいたつて混合流通制度の下における短期の諸問題に着目するにいたつたと思われる。⁽²⁾このことを取り上げたセイヤーズやさらにヴァイナー (Viner, op. cit., p. 228) の慧眼はもとより高く評価されるべきものであるが、しかしそれらの場合においても十分な究明がなされているようには考えられず、今後の検討にまづべきものが多いといわねばならない。さきに私が、リカアドの貨幣理論に対する『経済学批判』による、「おう」[見事な論評]とのべたのは、実はこの点に関係しているものである。

(1) 地金報告書がこのもつとも重要な点でリカアドと相違していたことについては、マルサスが当時すでに指摘していた (Malthus, op. cit., p. 361) が、これは、このようにヴァイナーによつて示され、さらにフェターによつて決定的に明かにされた (Fetter, F. W., The Bullion Report Re-examined, in 'Papers in English Monetary History' p. 67)。したがつて、ヴァイナーが地金派と反地金派とが、地金に対するプレミアムの発生を銀行券の減価と通貨管理の失敗の証拠とみなすかどうかに従つて区分されるとなしている (Viner, op. cit., p. 119) のは、十分に意味があるとせねばならない。

(2) リカアドは、一八一七年の『経済学原理』で、紙幣の過剰発行に対する制限としては、兌換の維持をもつて足るむねをのべている (Works, I, p. 356) しかしながら、一八二三年に書かれた『国立銀行設立案』では、周知のように、公開市場操作による発券統制の必要が主張されている (Works, IV, p. 284)。彼はまたこれよりさき、一八二一—二二年のデフレーションが、一八一九年のピール通貨法の、したがつて彼自身の責任であると非難されたとき、これに対して自己を弁護するために、一八二二年六月一二日の議會でつぎの注目すべき発言をした。「イングランド銀行が兌換の義務を負うているかぎり、公衆は紙券の量に關して銀行に干渉すべき何らの利害ももたない、紙券の量が過度に低ければ金が輸入され、過度に高ければ兌換によつて紙券が減少するからである、との意見に対して私は完全に同意するものでない、何となれば、銀行券の不当の減少のために自國が不都合をこうむるべき中間の時期があるはずだからである」(Works, V, p. 129) と。彼は、さらにこれよりさき、一八一六年の『経済的でかつ安定的な通貨のための諸提案』では、つぎのようにいつている。「されば商人間に信用が欠けていて、そのため彼らが信

用取引を拒絶して、支払に当つて相手の小切手、約束手形および為替手形を受けとるのを好まなくなる場合には、紙券たると金屬通貨たるとを問わずより多くの貨幣が必要となる。そして正しい諸原理の上にうちたてられた紙券流通に伴なう利益は、この増加した必要量が全通貨の価値、すなわち地金または何らか他の商品と比較した価値に変化をもたらすことなしに、直ちに供給されうるといふ点である。しかるに金屬通貨の制度においては、この追加量はしかく容易には供給されえないし、またそれが結局供給されたときには、地金と全通貨の価値は騰貴しているのである」(Works, IV, p. 68)と。さらにこの『諸提案』からの引用に関連して一言するならば、リカアドオはやはり同書で、一七九七年のさいのような一國全体のパニックにおいては、銀行はいかなる制度をもつてしてもこれから免れえないといふことをのべている(Works, IV, p. 68)のであつて、ここに彼がかかゝるパニックと商業信用の不振の場合とを区分して論じていることは明かであらう。リカアドオはこの区分をした上で、なお金屬流通および混合流通の下で問題があることを指摘するにいたつていのである。だからリカアドオは通貨原理という系譜をいふときに、どの階段のリカアドオを指すのが問題であるはずである。しかしさらにいえば、その通貨原理自身にもつぎにいうやうに問題があるであらう。

つぎに考慮すべき点は、銀行学派の目的が通貨学派の銀行政策とその理論的基礎とを破壊することにあつて、明瞭かつ一般的な政策の推進にあつたのではないことである。このことは一八四四年のピール銀行法に関連する諸事項を考察する上で、極めて重要な意味をもつと思われるが、ここではさしあたり、銀行学派がこの目的のために通貨学派の理論に対して多少の単純化をほどこしたのではないか、という疑問が生ずることを指摘したい。あらかじめ示しておいたように、通貨原理自体についての研究が必ずしも十分でなく、概していえばそれは銀行原理の側よりする批判を通じて間接的に知られているにすぎないといふ事情が、これに関係しているようである。このように考えてみると「ここに注意を要するのは、為替の逆調、地金流出をもつばら通貨量の過剰に帰せしめるリカアドオの思想が、そのまま通貨主義によつて継承されているかといふことである。銀行主義に属する人々はこれを肯定せむとくである。……けれども通貨主義が一般に考えられるごとく、地金流出の原因を必ずしも通貨量の過剰のみに帰するものではない

ことは銘記せられるべきであると思う」(一谷藤一郎『増訂金融統制の理論』、六一―二ページ)という一谷教授の見解は示唆するところが多いであろう。この点については、通貨原理による金融統制の究極の目的が「景気現象の総過程に対して貨幣側から全面的に交渉し、その阻止または緩和を目的とするものとは、とうてい考えられない。むしろその究極の目的は、ただ貨幣側の事情に基因して激化するべき恐慌の勢を、抑制もしくは緩和するにあると解すべきである」(一谷教授、前掲書、一一〇ページ)との指摘をも考慮に入れつつ、今後さらに検討を加えるべきであろう。

(3) Lewinsky, op. cit., p. 130 を参照。なお一谷教授もこれと同じ見解を示された(前掲書、四七ページ)。

む す び

イギリスにおける資本制生産の成長発展が、たえず世界商業との連関の中においてなしとげられて来たことは改めていうまでもない。そしてまた銀行業が、銀行券の発行とさらには預金制度とを通じて、この成長発展の過程を媒介し、支持し、かつ複雑ならしめて、資本主義制度の不可欠の一環となつたことも周知のところである。この二つの局面の結節点としての金、すなわち世界商業の用具であり、また銀行制度の基礎としての金をどう理解するかは、このような国の経済分析のよつて立つ根底をなす問題である。一八世紀の末から一九世紀の中葉にかけて、産業革命が急激な進向と成熟とをとげて、そこに必然に恐慌が発生したとき、地金論争と通貨論争との二つの貨幣論争が、史上稀にみる白熱的な勢をもつて展開されたことは、決して偶然ではない。

地金論争の時代には、戦争という経済外的な力が強く働いたこと、とくに兌換の停止という特異な事情が伴つたことのために、諸事態はきわめて複雑な表現をとつたし、このことがまたその事態を分析する理論に対して大きな制約を与へることとなつた。しかしながら、この時代の根底に銀行信用によつて媒介される景気変動が存在したこと、さ

らにこれに不作や外国援助金などの一方的支払が加わることによつて、問題が金の価格騰貴^{II}流出として結実したことを銘記しておかねばならない。また通貨原理の出発点が一八二五年および三六年の恐慌におけるイングランド銀行の金の涸渇であつたことは、通貨論争の真実の基礎が何であるかを暗示するであらう。

二つの論争の間の学説史的系譜の問題をいうについては、今後まだ多くの事項について一その研究がなされねばならない。本稿は、従来軽視されていたボウズンキットの主張の主要点を、リカアドオとの比較において明かにし、さらにこれを通じて孤立的に券券原理の相違だけをとり出して論ずるのは必ずしも十分でなく、理論のより深い部面における対立、つまり銀行券の基礎たる金、とくに世界貨幣としての金の把握における相違に注目すべきであることを示して、この問題の第一歩にふれたにすぎない。⁽⁵⁾

(1) 地金論争の時代の商業史的考察については、拙論「地金論争と商人階級」を参照。

(2) メーソンは「その世紀の中頃に、地金論争は漸次通貨論争に推移していった」とのべ(Mason, op. cit., p. 500) かつこれに注してつぎのようにいつている。「これをもつて、通貨学派と地金派、または銀行学派と反地金派とを同一視するものと解してはならない。問題も代表者も正確に同じではなかつた。どの問題を比較の基準とするかによつて、これらグループの間には、種々なる相意点と類似点とがある。ここでの重点は、通貨学派と銀行学派とが、為替レートの変動や金移動の独立の決定要素としての一方的支払の意義に關して、異なる見解をとり、この点ではそれぞれ地金派および反地金派と意見を同じうしていたということである」(Mason, Ibid., p. 500, n. 42) と。メーソンの二つの論争に關する研究は極めて刻明なものであつて、注目に値するものであるが、私がそこからとくにこの一句を引用したのは、彼のように「問題が同じでなかつた」とは必ずしも考えられないからであり、また、一方的支払の及ぼす効果について、彼のいう地金派→通貨原理、反地金派→銀行学派という系譜を單純に承認しがたいからである。本稿がもし何らかの意味をもつとすれば、それはこれらの点を評価しなおし、再整理してみることによつて、新たな意味を見出そうとするにあるともいえよう。

恐らく先走りする危険をおかすことになるであらうが、この新[、]意味についてあえて一言しておこう。それはあくまでも仮説

にすぎないことを強調しておかねばならない。地金論争の段階のリカアドオは、短期の問題と長期の問題とを区分しないまま、金属流通および混合流通を主張していたことを覚えておくのが根本である。ボウズンキットは短期の問題としてリカアドオを非難したが、地金派の中にもこの点に同調する人々があつた。そしてこれは銀行原理に継承された。後期のリカアドオは初期の彼自身を克服して長期と短期とを区分するにいたつていたようである。通貨原理はこの後期のリカアドオを承継したと思われるが、しかし具体的にピール法に制度化されたものは長期の問題のみであつた。そしてこの単純化された通貨原理こそが銀行原理によつて非難されたのである。

一九五七、四、二七